

まえがき

ディケーの概念はギリシア古典の中で特に重要な意味を持っている。アイスキュロスの「オレスティア」三部作の中で用いられている「正義」の概念についてはすでに述べたが⁽¹⁾、ここではトゥキュディデースの『歴史』の中でそれがどのような位置を占めているか研究してみたい。『オレスティア』においては、ディケーは単に神の正義というような倫理的な観念とは異って、正義と正義の争いという表現に見られるように、たがいに報復を繰り返すアトレウス家の悲劇を貫く象徴的なことばとして用いられており、それは市民間の抗争によって無益な消耗を続けるポリスの政治的状況とは無縁ではなかった。もしディケーという概念そのものにそういう対立抗争と関係する要因があるならば、その現象は更に現実政治の対立抗争を描写しているトゥキュディデースの『歴史』の中に反映されているはずである。

その観点からまず「正義」ディケーに関わる内容を持つことば、「正、正義、不正、不正行為」などに関連する派生語 (*dikaios, dikaiosyne, dikaion, dikaioma, dikaios, dike; adikein, adikema, adikia, adikos*)を『歴史』の中から拾ってそれを次表のように示してみたが、その結果は予期以上に歴然たるものであった。紙面の関係から表を簡略にしてあるが、要約するとこのディケーに関することばはトゥキュディデースの長大な作品の中でほとんどスピーチの部分にしか現われて来ないのである。『歴史』は歴史的事件の客観的な叙述の部分と重要な事件の当事者による弁論の部分とから成り立ち、現在の歴史書とは異った特異な構成を持っている。これは史家ができるだけ事からの真相に迫ろうとして個々の当事者がこう考え発言したと想像されるところに従ってその論旨を綴ったものであるが(1.22.1)⁽²⁾、そのスピーチの部分にこのディケーということばが集中していることは注目に値いする。他の叙述の部分に現れることばも、多くは間接話法の形をとっているもので、純然たる記述部分に現れるものはごく少ない。

結論を先にいうなら、これは『オレスティア』の場合と同じように、『歴史』においてもディケーは、自己の立場を是とし他の立場を非として斥ける一時的な論争の場面に好んで用いられる用語であり、その点からは、今述べたような現象が生じていても不思議でない。ここでは例証として第1巻のみとり上げて、その中に用いられているディケーの概念の追跡

をしながら、他のことばとの関連を調べてみる。以下の文章の中で繁雑を避けて明確化するためにディケーに関することばは「正、不正」という文字でできるだけ置き換えてある。それ以外の意味を持つ場合はそれに他の意味を書き加えてあり、またディケー以外の関連ある重要なことばは原語を添えてある。

表 ディケーに関する語の分布 (演説の部分のみ)

第一巻

32-36	ケルキューラ代表の演説	32・1, 33・1, 34・1, 34・2, 35・3, 35・4
37-43	コリントス代表の演説	37・1, 37・2, 37・4, 37・4, 37・4, 38・4, 39・2, 39・3, 40・1, 40・4, 41・1, 42・1, 42・2, 42・4, 43・3

(67-68 第一回ペロポネーソス会議)

68-71	コリントス代表の演説	68・3, 69・2, 69・6, 71・1, 71・2, 71・5
73-78	アテーナイ代表の演説	76・2, 76・3, 77・4
80-85	アルキダーモス王の演説	85・2, 85・2
86	ステネラーイダースの演説	86・1, 86・2, 86・4, 86・4, 86・5

(119-125 第二回ペロポネーソス会議)

120-124	コリントス代表の演説	120・3, 120・3, 120・3, 121・1, 122・3, 123・1, 123・2
140-144	ペリクレスの演説	140・1, 144・2

第二巻

35-46	ペリクレスの葬送演説	36・1, 37・3, 40・3, 41・5, 42・3, 43・5, 44・3
-------	------------	---

60-64	ペリクレスの最後の演説	60・7, 61・4, 63・2, 64・1
-------	-------------	------------------------

(71-78 プラタイア攻防戦)

71	プラタイア人のことば	71・2, 71・2, 71・4
72	アルキダーモス王の回答	72・1
74	アルキダーモス王の祈願	74・3, 74・3, 74・3

第三卷

9-14 ミュティレーネー使節の演説 9・2, 10・1, 11・4, 12・2

(36-50 レスボス諸市の離叛)

37-40 クレオーンの演説 38・1, 38・1, 39・1, 39・3, 39・3, 39・6,
40・3, 40・4, 40・5

42-48 ディーオドトスの演説 42・3, 42・3, 42・3, 44・1, 44・4, 44・4,
47・5, 47・5, 48・1

(52-68 プラタイア人の裁判)

53-59 プラタイア人の弁論 54・1, 54・2, 55・3, 56・1, 56・3, 56・5,
56・6, 59・1, 59・3

61-67 テーバイ人の演説 63・1, 63・3, 63・4, 63・4, 64・4, 64・4,
64・4, 65・1, 65・2, 67・1, 67・2, 67・3,
67・4, 67・5, 67・6, 67・7, 68・1

第四卷

17-20 スパルタの使節の演説 17・5

59-64 ヘルモクラテースの演説 61・4, 61・8, 62・3, 62・3, 62・4, 62・4,
64・2

85-87 ブラーシダースの演説 85・6, 86・6, 87・2, 87・3, 87・4

(89-101 ボイオーティア作戦)

92 パゴーンダースの演説 92・7

97 ボイオーティア人のことば 97・2

98 アテーナイ人のことば 98・1

第五卷

85-113 メーロス島の対談 86・1, 89・1, 89・1, 89・2, 90・1, 90・1,
97・1, 97・1, 98・1, 104・1, 105・1,
105・4, 107・1

第六卷

(75-88 カマリーナにおける外交交渉)

76-80 ヘルモクラテースの演説 77・1, 79・1, 79・1, 79・2, 79・3,
80・2, 80・2

本文

第1巻の概観

ケルキューラの紛争に関して、自国の「正義」と相手の「不正」

前432年にアテーナイが開戦決議によって三十年間休戦条約を破棄し、翌431年にテーバイ市民がプラタイアを攻撃することによってペロポネーソス戦争は開始されたが、両陣営の利害はすでにそれ以前から各所で衝突していた。その最大の事件の一つはエピダムノスに対する主権をめぐるコリントスとケルキューラとの紛争において、アテーナイがケルキューラを援助したことであった。

ケルキューラの植民市であるエピダムノスの内紛に関して、コリントスは両市にとっては母国であるという立場からエピダムノスに守備兵と船隊を送っていたが、これに抗議するケルキューラとレウキンメー岬の沖で海戦を前435年に行った。この海戦に破れたコリントスは報復を期して軍船を建造し戦いの準備を進めていたが、それまでアテーナイとスパルタのいずれの側にも属していなかったケルキューラは脅威を感じて、デーロス同盟に加わるべく代表をアテーナイに送った。一方コリントスもこれを知ってその企図を阻むためにアテーナイに使節を送り、両代表はアテーナイの民会でそれぞれ自国の立場を説明し相手を非難する演説を行った。

ケルキューラの使節は自分達の行動の正当性と敵側の不正を述べて、自分達を同盟に加えることがアテーナイにとっていかに利益になるかを市民に説く。他方コリントスの使節はケルキューラの不正を非難して自分達の正しさを強調するとともに、中立を守り不正にくみしないように市民に訴える、この演説の中で外交上の応酬が「正・不正」ということばを中心にやりとりされる点が注目に値する。

まずケルキューラの使節は今まで何の同盟関係もないアテーナイとの間に同盟を結び援助を要請することが、いかに両国の利益になるかということの説明することから話を始めるのが適切である *dikaios* と考えて口を切る(32.1)。そして自分達との同盟の利点を列挙しながら敵を侵略者 *blaptontes*、自分達を被侵略者(不正を受けた者) *adikoumenoi* として規定し相手の不正を非難する(33.1)。たとえアテーナイが中立を保っていてもいずれはペロポネ

ーソス側から戦争をしかけて来て、ケルキューラが滅ぼされた後でアテーナイも攻撃されるだろうと彼らは警告する。

またコリントスの植民市であるケルキューラと同盟することの是非については、たとえコリントスがそれを不正である *ou dikaion* といってもそれは母国が植民市に良い扱い方をしている時の話であって不正な扱いを受ければ *adikeisthai* 植民市も離反する(34.1)。この点ではコリントスの不正なこと *adikein* は明らかであり、彼らはエピダムノスの紛争を公正な処置によらず戦いによって決しようとしている(34.2)。またケルキューラと同盟を結んでもスパルタとの和約を破ることはならない。それは自分達がいずれの同盟にも属していないからである。しかるにコリントスはギリシア諸市から船員を集めておきながら、アテーナイがケルキューラを受け入れることについては不正行為 *adikema* として非難する(35.3)。だがもしケルキューラを受け入れなければアテーナイは一層強く非難される *en pleoni aitiai* ことになるだろう (35.4)。敵でないケルキューラを見棄てて、敵であるコリントスが海軍力を増強するのを黙認するからである。これが正しくないこと *ou dikaion* と考えるなら、ケルキューラを同盟に加えて援軍を送るべきである(35.4)。このようにケルキューラの使節は様々な論点から自分達の正しさと同盟の利点を説いてアテーナイ市民に訴える。

この主張に対してコリントスの使節は次のように反論する。ケルキューラはコリントスを侵略者(不正をなす *adikein* 者)とよび、自分達は不当に戦をしかけられていると言っているが、まずこの点について述べる必要がある(37.1)。ケルキューラは思慮によって *sophron* 非同盟政策をとって来たと言っているが、これは実際には徳 *arete* を行うためではなく、悪業 *kakourgia* を行うための政策であり、今まで同盟者を持たなかったのは不正行為 *adikema* の目撃者になられては困るからである(37.2)。彼らが地理的な条件を利用して裁判上の国際協定を守らない点に見られるように、彼らの見せかけの孤立政策も他国と共に侵略行為 *synadikein* をしないようにという手だてではなく、自分達だけで不正を働く *adikein* ためなのである(37.4)。もし彼らがその主張のとおり立派な人々であるなら、徳 *arete* を与えたり受けたりしてその正しさ *ta dikaia* を示すことができたはずである(37.5)。

ケルキューラ側は彼らは虐げられるために植民されたのではないといっているが、それなら自分達は植民市から横暴なふるまいを受ける *hybrizesthai* ために植民したのではないと言おう(38.2)。他の植民市がコリントスを母国として尊敬しているのに、彼らだけが不満に思うとすれば、自分達が戦ったのは非道 *ekprepos* なことではない。それははなはだし

く不正を蒙った *diapherontos adikumenoi* からである(38.4)。たとえば非 *hamartanein* が自分達にあったとしても、自分達にゆずるのが彼らの取るべき態度であり、そうすれば自分達も彼らの節度ある態度 *metriotes* に対して暴力を揮うこと *biazesthai* を恥じたであろう。ところが実際は彼らは不遜 *hybris* と富の傲り *exusia plutu* によって、自分達に対して様々な非を犯して来て *hamartanein* あり、エピダムノスが窮地にある時には援助を与えずにおきながら、自分達が救援におもむくとそれを占領したのである(38.5)。

ケルキューラは彼らの方が先に法的解決を求めたと言っているが、自分達がエピダムノスを攻囲してからやっと法的解決を求めたのである。その彼らの真意は彼らが過誤を犯す *hamartanein* のみならず、アテーナイにも共に不正を行う *synadikein* ようにさせるためである(39.2)。彼らが同盟を求めるときは彼らのもっとも安全な時であって、危険にさらされている現在ではない。今まで彼らから何の援助も受けなかったアテーナイが、今彼らに力を貸すことは、彼らの過誤 *hamartema* に加わっていないのに同じ非難 *aitia* を受けることになる(39.3)。

コリントスはケルキューラに対してこのように当然の苦情 *enklema* を持っているわけであり、彼らの横暴 *biaios* と貧欲 *pleonektes* とは明らかになった。だから彼らを同盟に加えることは正しくない *ou dikaios* (40.1)。なるほど条約に加わっていないポリスはいずれの同盟に加わることもできるが、これはケルキューラにはあてはまらない。紛争中の一方を同盟に受け入れることによって、アテーナイは和約を破りコリントスの敵となることになるのだから、正しい *dikaios* 道は中立を守るかコリントスに味方するかのいずれかである(40.2)。これらの主張に関してコリントスはアテーナイに対して十分な正しい根拠 *dikaioma* を持っている(41.1)。それは自分達が過去にアテーナイに対して与えた様々の恩誼 *charis* である(41.1)。

以上のことを考えて、アテーナイはコリントスに力を貸すことを可としなければならない。そして自分達コリントス人が正しいこと *dikaia* を言っているが戦争になれば災にまきこまれるなどと考えてはならない(42.1)。誤ちを犯すこと *hamartanein* が最も少ない時に、最大の利益が伴うのだから(42.1)。そしてケルキューラが恐れてアテーナイを不正を犯す *adikein* ように誘った戦争の脅威はまだどこにもないのだから、コリントスに対して露骨な敵意を示すのは間違っている(42.2)。目前の利欲 *to pleon echein* にまどわされて危険を冒すより、自分に匹敵する者に対して不正を働かぬ *me adikein* ことがより確かな力である(42.4)。ケルキューラを自分達の意志に反して同盟に加え、彼らの不正 *adikein* を助けては

ならない(43.3)。

こういう発言をコリントスの使節はアテーナイの民会で行った。上の両者の外交上の応酬をふり返って見るなら、そこに述べられる弁論は、現実の紛争に関する客観的な記述部分とは対照的に、相手側が先に侵略して不正を働いたのであり、自分達は正しくて非難される点は少しもなく、第三者であるアテーナイは不正に加担せずに正しい方を助けよ、という一方的な「正・不正」の論理で貫かれていることに気がつく。こうした意味でのディケーに関することばのまわりに、徳 arete、過誤 hamartia、傲慢 hybris、貪慾 pleonexia といった徳性に関することばがちりばめられている⁽³⁾。これは現代の歴史記述の仕方とは際立って異っており、むしろ古代の悲劇作家の手法に似通っている⁽⁴⁾。トゥキュディデースは「歴史」の中の主要な事件については、ほとんどこのような紛争の当事者の口を借りて主観的な論争を戦わせておいて、歴史家としての自分はその論争の間をつなぐ客観的な事件の記録者の立場に抑え、できるだけ主観的な判断を表わさないように努めている⁽⁵⁾。これは悲劇における伝令の役割にも似ていて、なぜ彼がこのような手法を選んだか考えさせるものがある。悲劇における観客の立場にある読者に最終的判断をまかせようという態度の表われであろう。

ポテイダイアの紛争に関して、相手側の「不正」の非難 aitiai

ペロポネーソス戦争の開戦に導くもう一つのきっかけである前 432 年のポテイダイアの紛争においても同様の事実が認められる。ポテイダイアはコリントスの植民市であったが、アテーナイと同盟を結び同盟の貢納金を支払っていた。しかしアテーナイはポテイダイアの離叛を恐れて三項目の要求を突きつけ、その執行のために船隊を送った。ポテイダイアはスパルタの援助の約束をとりつけたのち同盟から離叛し、アテーナイから到着した船隊と交戦した。コリントスとペロポネーソスの援軍もマケドニア人の支援を受けて戦闘に加わり両陣営は戦争状態に入ったが、まだ公然と和約を棄てて全面的な戦争に突入するまでには至らないままに、両者は互いに外交上の非難 aitiai を応酬した(66.1)。コリントスはこの紛争について討議するためにペロポネーソス同盟の会議を呼びかけて、スパルタ市民の前でアテーナイを和約侵犯の件で不正であると非難した adikein、adikeisthai (67.1,3)。

コリントスの代表は次のようにアテーナイをペロポネーソス同盟の代表の前で非難する。自分達コリントス人がこれまでしばしばアテーナイから侵害を受ける blaptesthai 可能性について警告を発して来たにもかかわらず、スパルタ人はそれを疑っていたためにこの

ような結果になってしまったが、コリントスはアテーナイの横暴 *hybrizein* とスパルタの無関心とに対して強い非難 *enklema* をする(68.2)。もし取るに足らぬ者どもがギリシアに対して不正を働いた *adikein* のなら、それを知らない者に説明をする必要もあろうが、今は長口舌を揮う時ではない(68.3)。これらのことについて責任ある *aitios* 諸国が、侵略されたか *adikeisthai* どうか考慮しているべき時ではなく、いかにして身を守るか考えるべきである(69.1,2)。アテーナイはすでに兵を動かして迫っているのにスパルタは何もしていない。それはペルシア軍が自身の誤ちで失敗したようにアテーナイも自分の誤算 *hamartema* で失敗するだろうと考えているからだ(69.5)。しかしこういうことを言うのは憎しみからではなく諫言 *aitia* のためであり、この諫言は誤ちを犯した *hamartanein* 味方のために言うのであって、不正を働いた敵に対しては告発 *kategoria* をするだけである(69.6)。

アテーナイ人とスパルタ人とを比較するなら、アテーナイ人は実力以上に敢行し *tolman* 良識に反しても危険を冒すのに、スパルタ人はためらい続けている(70.3)。このような国民に対抗して平和を守っていくためには、戦備において正しい備え *dikaia* をなし、考え方においては受けた不正 *adikeisthai* に対しては決してそれを許さないということを明らかにするだけでは不十分である。それなのに他者に害を与えなければ自分の安全も守られて害を受けない *me blaptesthai* で同等の扱いを受けるものとスパルタ人は考えている(71.1)。このような愚図ついた態度はこれで終りにして、約束のとおりアッティカに兵を進め友邦を助けてほしい。もしスパルタがためらっているために自分達が同盟を絶っても自分達は不正 *adikos* ではない、なぜなら孤立無援の故に他に走る者が盟約を破るのではなく、同盟者を助けた者がそれを破るのだと言われているからである(71.5)。

コリントスの代表は以上のようにアテーナイの非を挙げてスパルタの奮起をうながした。ここでは「正・不正」のことばに加えて、非難を意味する *aitia* がスパルタを諫めることばとして用いられている。コリントスの代表は必要以上にアテーナイ人の果敢と進取の精神を讃えることによって、それと対照的なスパルタ人の逡巡と保守性に対して忠告しているのであるが、この *aitia* が *enklema* と共にスパルタ人に向けられていることが注目される。

この時たまたまスパルタに他の用事で来合わせていたアテーナイの使節が、この会議を知り、スパルタの参戦を思い止まらせようとして自国の立場を次のように述べた。

自分達がここに来たのは諸都市の非難 *enklema* に反論するためではなく、スパルタが大

事を軽々しく扱って悪しき決定をしないためであるが、まず自分達は道理に適い正當に *oute apeikotos* 今所有しているものを得たのであることを説明したい(73.1)。ペルシアの侵略からギリシアが救われたのは自分達の果敢な勇氣 *tolmeros prothymia* によるものであったが(74.1,2)、その勇氣と知的な判断力とによってこの支配圏 *arche* を得たのであり暴力 *biazesthai* によるものではない(75.1)。スパルタがペルシア戦争の続行を拒否したので、自分達は同盟者の側から盟主になるように要請されたのである(75.2)。自分達が一人与えられて得た支配圏 *arche* を放棄しないからといって人間性に反していることにはならない(76.2)。自分達もその地位にふさわしいと思ひ、スパルタ人も今日彼ら自身の利害から正義論 *ho dikaios logos* に訴えるまではそう考えていた(76.2)。力 *ischys* によって獲得する機会がありながら侵略 *pleon echein* を控える者は居ない(76.2)。人間性に従いながら自分の持つ権力 *dynamis* によらず正しく *dikaios* 他を治めることができるものは賞讃に値する(76.3)。暴力 *biazesthai* を行使できる者は、法の裁き *dikazesthai* を必要としない(77.2)。人は不正を受けること *adikeisthai* の方を、暴力を蒙ること *biazesthai* の方より憤るものらしい(77.4)。

アテーナイの使節はこのようにペルシア戦争における自国の貢献とその支配の正当性を説いてスパルタに自重を要求した。ここに表われているのは強者による力の論理の明確な主張であって道徳的観点からの正義論は述べられていない。むしろそういう正義論は自分の利害から出た御都合主義として斥けられているのである。この力の論理はプラタイアにおけるスパルタ側、メロス島におけるアテーナイ側の口を通して冷厳な現実政治の一面として容赦なく語られているのである⁽⁶⁾。

スパルタ人は同盟者側の非難 *enklema* とアテーナイ側の弁論とを聞いてから自分たちだけで協議し、アテーナイの侵略行為 *adikein* を認めて開戦の意見に傾くが、アルキダーモス王は慎重論を説いて次のように述べる。彼はアテーナイの海軍力、経済力を見くびって開戦を急ぐことの愚を指摘して、それよりも彼らの行為を糺弾する *aitiasthai* 使節を送り、その間に戦備を整えるように提案する(82.1)。自分達が直ちに行動に移らないのは臆病 *anandria* の故ではなく(83.1)、分別 *sophrosyne* の故であり賞讃や非難によって動かされることはない(84.2)。自分たちに秩序ある *eukosmos* 生活態度の故に分別や勇氣 *eupsychia* を持っているのであって、このような幼時からの教育を忘れて性急な決議をしてはならない(85.1)。まずアテーナイの侵略行為 *adikeisthai* について糺問の使節を送り、もし彼らが裁定に應ずる用意があるなら彼らを不正だと *adikein* きめつけるのは違法である(85.2)。

このようなアルキダーモス王の発言に対してスパルタの監督官ステネラーイダースは次の短かい演説で開戦の決議を要求する。

アテナイ人は長々と自分自身を賞讃したが、彼らは不正を行って *adikein* いないと否定することはしなかった(86.1)。もしスパルタ人に分別があるなら不正を受けた者たち *adikoumenoi* を見過ごして報復 *timorein* をためらうことはできない(86.2)。ことばではなく現実に被害を受けているのに、裁判やことばで裁定を行うべきではない。不正を受けた自分達 *adikoumenoi* が熟慮することはふさわしい事ではなく、これから不正を為そう *adikein* とする者こそそうすべきである (86.2)。開戦の決議をして、神々と共に侵略国 *adikountes* に進撃しよう (86.5)。

この演説の後で市民たちはアテナイの侵略を事実と認める決定をし、同盟諸国の開戦決議があり次第スパルタが参戦することを明らかにした。上の二人の演説は、一方はスパルタ市民に分別を求め、他方は決断を迫る点で対照的なものであるが、六章にも及ぶアルキダーモスの演説の中で *adikein* という語はただ一カ所に二度使われているのに反して、ステネラーイダースは短かい一章の中で五回もこの語を反復使用している。この事実からも「正・不正」ということばは自己の立場を弁護し敵を非難する時に好んで用いられることが明らかである。

第2回ペロポネーソス同盟会議、開戦の口実 *prophasis*

この後第89章から第118章まで「五十年史」の記述が挿入されて、第二回ペロポネーソス同盟会議の様子に移る。スパルタ人はデルポイの神託により神の加護のあることを知って会議を召集し、その席でコリントスの代表は開戦決議を求めて次のように述べる。

今や事態はスパルタ人を非難して *aitiasthai* いるだけでは済まないまでになった(120.1)。危険は海岸地域ばかりでなく内陸部にも及んでいる。思慮のある人間は不正を受け *adikeisthai* たければ平和を守っているが、勇気のある人間は不正を受けた時には *adikeisthai* 平和を捨てて戦い、戦いの幸運に有頂天になったり平利の安逸にふけて不正を甘受したり *adikeisthai* しない(120.3)。自分達は不正を受けて *adikeisthai* から戦を開くのであり、またそれに十分な非難の根拠 *enklema* を持っている。だからアテナイを撃退すれば戦を取める(121.1)。味方の軍資金も兵力も勇気も敵に劣らないが、アテナイのような強国に対しては結束して対抗しなければならぬしそれができなければ敗北する。このようなことは仮定するだけでも恥辱であるが、もしこれだけの数のポリスがただ一国に負けるなら

ば、それは臆病のゆえにそれを甘受するのであって当然の結果 dikaios paschein と見られるだろう(122.3)。スパルタ人は敵を侮って kataphronesis 多くの者に害を与えて来たが、今それは無思慮 aphrosyne と人々から呼ばれるはめになった(122.4)。しかし現在役に立つことでなければ過去をあげつらう aitiasthai べきではない、苦難から徳 arete を得るのがスパルタ人の伝統である(123.1)。富と資力において昔に勝るからといって本性まで変えるべきではない。困窮によって得たものを富んでから失うのは正しく dikaios ないからだ(123.1)。「神の加護」が約束されている以上戦を始めても和約を破ることにはならない、すでに破られた和約を守るために戦うのだから(123.2)。

コリントスの代表はこのように語り、列席の多くの代表が開戦決議の票を投じた。しかし実際に同盟軍がアッティカに侵攻して公然たる戦闘状態に入るまでには一年ほどの準備を要した。その間かれらは開戦の口実 prophasis を求めて非難 enklema を互いに相手に対して送った(126.1)。スパルタ人はキュローンにまつわる神の呪いを清めよとアテーナイ人に要求したが、実際にはこれはペリクレースの失墜をはかったものであった。一方アテーナイ人はタイナロスとカルキオコスの子神の呪いを清めよとスパルタ人に要求して返した。これはいずれも双方が宗教的に穢れているとされた者の追放を求めたものであった(139.1)がスパルタの最後の使者はただギリシア人の独立 autonomia を要求しただけであった(139.3)。この要求に対してアテーナイ人は民会を招集したが、そこでペリクレースは次のように発言した。自分の意見は常と変わりなく、ペロポネーソス側に譲歩してはならないということである。人は開戦の時は戦争中の時とは別な感情に動かされるが、自分はいつも変らぬ意見を述べるべきだと思うし、自分に従う者も万一失敗した時にも一緒に決議したことを支持し続けてほしい。事件の動きは人知では計り難いが人は理性によって説明のつかない事態にであうと運命に責めを負わせる aitiasthai ものなのである(140.1)。

スパルタ人が前から自分達に対して陰謀を企んでいたことがこれで明らかになった。相互の紛争は裁判によって解決する取決めがあるのに、彼らは法的解決の申入れも受入れもせずに、その非難 enklema を話し合いによらず戦争で解決しようとしている(140.2)。最後の使節はギリシアに独立を与えよと言っているが、些細な問題から戦争に突入するのだと考えてはならない、ここに自分達の安否と判断力とがかかっているのである。だから害を受ける前に屈服してしまうか、それとも決戦するかを考えてほしい、そして大小を問わずいかなる口実 prophasis にも譲歩しないで単なる現状維持の態度を棄ててもらいたい(141.1)。

もし自分達が戦争中に支配圏 *arche* を拡大しようとする危険を冒さなければ勝利の希望は大いにある。しかし味方の誤ち *hamartia* を敵の作戦よりも自分は恐れている(144.1)。自分達には規約に従って裁定を受ける意志があり、戦争を仕かけることはしないが仕かけられれば防戦する、これがこのポリスにとってふさわしい正しい *dikaios* 回答である(144.2)。戦争は不可避であると知らねばならない、父祖たちは運命によらず作戦によって、戦力ではなく果敢さ *tolme* によってペルシアを撃退したが、自分達はそれに劣ってはならない(144.4)。

ペリクレスはこのように発言した。アテーナイ人は彼の提案を可決して、スパルタの非難 *enklema* には対等、公平な立場で規約に従って裁定に応ずる用意があると伝えたが、スパルタの使節は帰国して再び来訪しなかった(145)。

以上の非難 *aitia* と紛争 *diaphora* がエピダムノスとケルキューラ間の事件から開戦までの期間に両陣営の間で交わされた(146)。その後も特に休戦のしるしをかかげたりすることもなく両国間の往来はあったが、たがいに疑いの眼を光らせていた。それはどんな事件も和約の侵害 *synchysis* であり、開戦の口実 *prophasis* となり得たからである(146)。

まとめ、「正義」の主張と開戦の口実 *prophasis*

以上に記したようにディケーに関することばは、『歴史』の第1巻では対立する二つの陣営の代表の演説の中で、互いに自己の立場を主張し相手を非難する議論の中で使われる主要な用語として現われていることが明らかになった。これは「自分が正しくて、相手は正しくない」という論法から当然に予想される事実であり何の不思議もないことだが、重要なのは表にその一端を示したように、全体で340例あまりに上る用語のうち大部分がスピーチの部分に集中して濃い密度で用いられているという点である。これはペロポネーソス戦争の開始以来大戦の帰趨に大きな関心を持って記録を取り資料を集めて来た史家が、その大戦の原因を探って記した『歴史』の著作態度の本質にかかわる問題だからである。第1巻の分析で示した「正・不正」のことばが対立論争するスピーチの部分にのみ見られてそれを結ぶ記述部分にほとんど現われないという事実は、結局トゥキュディデースがそういう価値判断を自ら表面に押し出すことをできるだけ避けて、自分は可能な限り客観的な資料提供者、記録者の立場にとどまって最終的判断は読者に委ねようという姿勢を裏付けるものといえよう。これは決して彼が自己の判断を放棄したのではなく、スピーチそのものの選択、創作、構成などにおいて充分歴史家としての独自の方針を貫いているのであ

り、むしろその目的を有効に実現させるためにこそこの相反する観方・意見を当事者の口を借りて争わせたのである⁽⁷⁾。この論争の手段としてディケーを中心とする価値判断に関することは大きな役割を持たされたわけである。また上の分析の過程で、「正・不正」の用語に関連して、すべての論法は開戦を正当化する口実 *prophasis* を求めての非難 *aitiai* の応酬であるということが明らかになったので、次にこの *aitiai* と *prophasis* について少し述べてみよう。

「もっとも真実に近い口実」 *alethestate prophasis* について

第1巻はペリクレスの演説の後に来る第145、146章の締括りで終わっている。いわゆる「考古学」と呼ばれる『歴史』全体の前書きに相当する部分とケルキューラの紛争から本論に入る部分との間の第23章にも、また開戦直前であり第1巻の締括りである第146章にもいづれにもわずか10行ほどの間に *diaphorai*、*aitia*、*prophasis* ということばが用いられている点に注目したい。トゥキュディデスはペロポネーソス戦争の「最も真実に近い口実 *prophasis*」を求めて(23.6)ケルキューラの紛争 *diaphorai* から記述を始め、和約破棄にいたる諸原因 *aitiai* を問いながら両陣営から公けにされた非難の理由 *aitiai* をそれぞれの当事者の口を通して述べさせて来たのである⁽⁸⁾。

その結果は上に追跡して来たように、双方が自分を是として相手を非となす「正・不正」(あるいは正・邪)の論理を押し進めていることが明らかであり、そこにおいてはディケーに関連して用いられている *aitia* は *enklema* と同様に非難の意味で使われていて、こういう論法は双方が和約破棄の責めを負う *aitiasthai* ことなく戦闘行為に入れるようにと考えて、その為の口実 *prophasis* を得るための外交的駆け引きに使われているのである。

この間のいきさつを特に第2回ペロポネーソス会議でのコリントス代表の演説と、アテナイにおけるペリクレスの演説とがよく示している。開戦にもっとも熱心なのはコリントスであり、そのためにその代表は第37～43章でも、第68～71章でも、また第120～124章でも「正・不正」の論を頻発し、スパルタ人のためらいを無分別として非難しているが、それを受けて立つペリクレスはこれらの非難が口実であることを良く知っていて決して譲歩しないように市民に説いている(141.1)。そして彼自身は「正・不正」の論理を用いていないが、それはもう彼が口実を受けて立つ用意ができており、その心構えを市民に説いているのであってここでは敵に向かって不正を指摘して反論しているのではないからである。

さてこのように注意深くみごとに構成された第1巻は、その用語においても必ずや厳密な配慮をもって書かれているはずである。未完成といわれる第8巻にはスピーチが含まれていないことを考えると⁽⁹⁾、トゥキュディデースは一旦書き上げた草稿をスピーチを中心にした現在の形に書き改めたのだと考えることができる。そしてそのスピーチをつなぐ縦系になるものが口実 *prophasis* を求めての非難 *aitiai* の応酬であって、その記述の導入部分である第23とまとめの部分の第146章にまた *prophasis* と *aitiai* が置かれているという事実から、これらが相互に無関係に別の意味に使われているとはどうしても考えられない⁽¹⁰⁾。

ところが1.23.6の *prophasis* の解釈に関しては従来定説として一致するものがなく、大別して主観的な「口実」と見るか客観的な「動機・原因」と見るかの二つに意見が分かれている⁽¹¹⁾。ここではその一つ一つを取り上げて論ずる余裕はないが、上に述べて来た観点から筆者は主観的な「口実」という意味をこの箇所から除かない方が良いと考える。

しかしこの箇所は「両陣営から公けにされた *aitiai*」に対して「最も真実に近い *prophasis* は、人が一番言っていないことではあるが、アテーナイが強大になり、それがスパルタ人に恐怖を与えたので彼らは開戦を余儀なくされたのだと考える」と史家が言っているように、必ずしも一方の言い分のみこだわらず「一番真実に近い」つまりできるだけ客観的な *prophasis* を探ろうとする態度の表明でもあるので、これをどちらか一方に割り切って一語で訳すのは非常な無理があると考ええる。強いてこの *alethestate prophasis* を訳すなら「動機や口実は様々だが、その中で最も真実に近いと思われるものは—」とふくらませて訳すのが折衷的ではあるが適切な方法であろうと思う⁽¹²⁾。

註:

- (1) 『西洋古典学研究 XVII』(岩波: 1969) pp. 22-27.
 - (2) F. E. Adcock はこの論法を dialectical argument とよび、トゥキュディデースはこの弁証法的議論によって考える時代に生まれ、その技術を身につけ、事件をこの方法によって解釈し判定しようとするのだという。Adcock, *Thucydides and His History*, pp.43-49.
 - (3) J.de Romilly はアテーナイの帝国主義の特質として hybris, pleonexia とを挙げている。Romilly, *Thucydides and Athenian Imperialism*, p.336 ff.
 - (4) H.L.Jones によれば、トゥキュディデースが悲劇のことばを用いているのは、悲劇に彼が影響されたのではなくて、悲劇作家やヘロドトスと同じく、叙事詩に影響されているからである。L.Jones, *The Justice of Zeus*, pp.43-49.
 - (5) L. Edmunds は『歴史』には歴史の中の行為者と、歴史を記述する歴史家との両者の観点があり、トゥキュディデース自身の観点は記述部分にも、またスピーチと記述部分との構成の仕方にも両方に表われているという。p.4 cf. Finley, *Thucydides*, pp.102-103.
 - (6) Ste.Croix は、このアテーナイ人の態度は伝統的に「力は正義なり」という思想の表われであると解されて来たがそれは正しくなくて、実は彼らは紛争を道徳的な「正義論的考察」から論ずる態度を拒否しているのだと考える。
Ste. Croix, *The Origin of the Peloponnesian War*, pp.14-15.
 - (7) J.H. Finley はこの手法を Antiphon の Tetralogia と比較している。
Finley, *Thucydides*, pp.98-99.
 - (8) これらのスピーチは、各状況下での要因と考えられるものを史家がそれぞれの演説者に語らせているのだと Finley はいう。p.96.
 - (9) F. M. Cornford, *Thucydides Mythistoricus*, p.55.
 - (10) De Romilly はトゥキュディデースが「最も真実に近い口実」 alethestate prophasis を最初から構想の中に抱いていて、それに後になって第二の cause をつけ加えたとは考えられないという。Romilly, op.cit., pp.17-24.
 - (11) これらの意見については Rawlings が要領良く紹介している。
Rawlings, *A Semantic Study of PROPHASIS to 400 B.C.*, pp.61-64.
- 下に筆者が調べた範囲の解釈を記しておくが、筆者の意見はこの二つを合わせた

Rawlings によれば multiple meaning explanation といわれる立場である。

- ・(L-S)は Th., 1.23.6 のこの prophasis を the actual motive, purpose or cause と説明している、cf. Finley, op.cit., p.68.
 - ・Gomme は aitia を 'an immediate cause of the war', prophasis を 'psychological cause' と説明する。Gomme, *A Historical Commentary of Thucydides*, 1, p.153.
 - ・L.Edmunds は aitia を 'immediate cause' であり subjective なもの、prophasis を 'fundamental, underlying cause' として objective なものとする。
Edmunds, *Chance and Intelligence in Thucydides*, pp.172-173.
 - ・De Romilly は aitiai を 'immediate causes', prophasis を 'the real cause' としている。
Romilly, op.cit., p.18.
 - ・Ste Croix は aitiai と prophases とを 'the openly expressed grounds of complaint' と 'the truest explanation' との二つに分けて考える見方を否定して、Dionysius of Halicarnassus の考えるように、この二つのことばは同意義に用いられていて、同一の事柄の二つの異った観点を表わすと考える。Ste. Croix, op.cit., pp.61-63、
しかし W.K. Pritchett はこれに反対してトウキュディーデースのように用語に厳格な人が二つのことばを同じ意味で用いるはずがないという。
Pritchett, *Dionysius of Halicarnassus: On Thucydides*, pp. 61-62.
 - ・Rawlings は prophasis を I. the phemi-derived lexeme と II. phaino-derived lexeme との二つに分類する。そして I は主観的、II は客観的であり、1.23.6 の用法はこの II の例でヒポクラテス的用語だと説明する。Rawlings, op.cit., pp.70-71.
- (12) 正義論と aitiai, prophasis との関連について、既に田中美知太郎氏が論じておられるが、筆者はここで『歴史』第 1 巻の演説部分に表われる dike の性質から、prophasis の意味を考察した。
-